



学校法人
鎌倉女子大学

図書館「武藤光朗文庫」の開設

殊に戦後の思想史に関心のある人ならどなたもご存知の方だと思いますが、武藤光朗という哲学者・社会思想家がいらっしゃいました。武藤先生は、早稲田大学・中央大学等で教鞭をとるかたわら、蠟山政道、猪木正道、関嘉彦氏等と「民主社会主義研究会議」を創設し、蠟山氏に次いで第二代の議長に就任し、現実政治にも大きな影響を与えた方でした。

1914年、福島県にお生まれになり、左右田喜一郎の経済哲学に触発され、一橋大学に入学、生涯にわたり決定的な影響を受けることになるマックス・ウェーバーやカール・ヤスパースといった碩学たちの思想に魅惑されることになります。因みに、左右田喜一郎という方は、西田幾多郎の哲学の個性と規模を逸早く評価し、その哲学に初めて「西田哲学」と固有名詞を冠して呼ぶ意義を提唱した人としても有名です。

さて、武藤先生の学風は、哲学を仲間内だけで通用する趣味的世界に閉じ込めてしまったり、訓詁学的講壇哲学に満足してしまうのではなく、常に現実と格闘し、現実を変革しようとする、自分自身を賭した実存的活動といったところがありました。それは、初めから先生の心情に深く根差したものであることが出来るように思われます。そのような姿勢は、経済をめぐる現実世界への関心から哲学という学問に足を踏み入れたということからも容易に窺えることでしょう。

ビリー・ジョエルの「ストレンジャー」やキング・クリムゾンの「星のない暗闇」といった若者の支持を受けるロックミュージックにも、むしろ若者たちよりも早く注目し、彼等の感覚を議論の素材としながら現代人の精神と社会を解析しようとされたのも、そうした関心の向け方と通底するもののように思われます。

民主社会主義研究会議を興されたのも、特に日本の戦後が、戦前の右翼全体主義への反動から、スターリニズムやマオイズムさえ肯定するかのような左翼全体主義的風潮に侵食されてしまうことへの強い危機意識によるものでありました。東西の峻烈なイデオロギー対立や熱戦をすぐそこに想像させる冷戦の激化は、何といても戦後世界を圧倒的に支配するものであったからです。左右のイデオロギーと鋭く対決して、自由な精神風土の中で培われる^{コモンセンス}良識に基礎をおいた中道の歩みをこの国に育てようといったところに先生の政治姿勢はあり、その意味で冷戦以後の今日の政治状況の創出に思想的に貢献した先駆者の一人と評することも出来ようかと思えます。

晩年にはインドシナ復興問題等にも取り組まれましたが、ご自身が生きる現実への関心と情熱は、最後まで変わることはありませんでした。

長身で、温雅なお顔立ちの、物静かなジェントルマンでいらっしゃいましたが、こと日本の行く末に関わることとなると、一党を率いるような豪腕政治家が卓をたたいて強押し

でも、一步も引かずに自説を貫き、説き伏せる、知識人の役割と責任を本当の意味で引き受ける方でありました。現実が立ちはだかると、「私はそのような俗事には関心をもたない高尚なアカデミッシャンです」と逃避的に判断中止を決め込むひ弱なインテリが多いわが国にあって、数少ない勇氣ある知識人であったように思います。それでいて、ヤスパースの大著の翻訳の他、全三巻にわたる『経済哲学』、『例外者の社会思想』等々と、実存哲学・経済哲学・社会哲学の分野においてアカデミックな多くの著作を残した方でもありました。

私自身は、といえば、若い頃から目を掛けて頂き、まだ駆け出しの30代半ばの頃であったにも拘わらず、私を信頼して下さり、国際会議のプランニングコミッティーの日本側委員に推挙して下さったのも、先生でしたし、拙著を上梓するごとに、一本を献上したり、また先生からもご本を頂戴したりと、そんなご縁もあり、この度ご遺族からのお申し出で、最後まで身の回りにおかれた蔵書を寄贈して頂いたものです。

蔵書内容は、先のウェーバーやヤスパース、エーリッヒ・フロム、ハーバート・マルクーゼといった20世紀を代表する思想家の原書、哲学、倫理学、社会・経済・政治思想といった和書を中心に約900冊に上ります。

先生のご本は、特に新しい教育学科の教員諸氏や学生諸君にも活用されることになるでしょうし、図書館では、「武藤光朗文庫」として開設することになりましたので、関心のある方々は、手にとって見て頂ければ、先生もきっと喜んで下さるのではないかと思います。

[>前のページへ戻る](#)